

タイトル：「核保有国のリーダーから核なき未来のリーダーに変わるために」

「核戦争に勝者はなく、決してその戦いはしてはならない」

この宣言は 1985 年、アメリカのレーガン大統領とソ連のゴルバチョフ書記長がジュネーブでの首脳会談で共同声明に明記したものだ。それから 37 年経った 2022 年にもこの宣言は、核保有国が発表した核軍縮・不拡散に関する共同声明で再確認された。核保有国がこの宣言を発表したことは、被爆地ナガサキの出身である私にとって、核兵器の削減・廃絶に向けて積極的に取り組むという意志を感じた。しかしながら、核兵器の削減どころか、世界の現役の核弾頭数は増加し、核兵器使用のリスクは更に高まっている。

核保有国のリーダーに問いたい。「あなたは、被爆地ナガサキを、そしてナガサキの原爆資料館を訪れ、被爆者と対話したことがありますか。」

世界で最初の被爆地である広島に、国のリーダーが訪れた機会は多くはない。しかしながら、「最後の被爆地」であるナガサキを訪れた現職の大統領はソ連のゴルバチョフ大統領だけである。原爆を投下したアメリカの大統領や核保有国の多くは未だ長崎を訪れていない。広島資料館を見たから長崎も同じだと考えてはいけない。あなた方が口にする被爆地や被爆者といったひとまとまりにされた言葉の中には、それぞれの被爆地に被爆者一人一人の人生や背景があり、家族がいて、生活があって、思い出があって、夢と希望にあふれていた。今を生きるあなた方一人一人の生活や人生と何も変わらないのである。それがたった 1 発の原爆によって何もかも一瞬にして奪い去った。さらには、放射線による影響で、被爆者はいつ発症するかも分からない病気への恐怖と常に隣り合わせで生活している。原爆は被爆直後だけではなく、「いのち」「くらし」「こころ」への複合的影響を与え続け、生涯にわたり被爆者を苦しめている。被爆者は亡くなるまで被爆者であり、亡くなる時まで被爆体験は続いているのである。その全てを受け止めるには痛みを伴うかもしれないが、その事実を直視し向き合うべきである。データや伝え聞いたことではなく、あなた方の目でみて、対話を重ねて、事実と向き合う必要がある。被爆地を訪れ、被爆の実相と向き合い、被爆者一人一人の話に耳を傾け、原爆が投下された日に思いを馳せてほしい、いや馳せるべきである。

被爆から 79 年、被爆者の平均年齢は 85 歳を超えた。被爆者と直接話をする時間は非常に限られている。しかし、幸運にもまだ残されている。核保有国のリーダー一人一人が被爆の実相と向き合い、感じたことや被爆者の思いを、「核なき未来をつくる」リーダーとして一人でも多くの人に共有してほしい。また、あなた方には、長崎や広島で捕虜として被爆した被爆者やアトミック・ソルジャーとも向き合ってほしい。

ここまで読む中で、なぜ私があなた方の被爆地訪問を切に願うか腑に落ちない方もいるかもしれない。ここで、私自身の経験を紹介する。平和活動に取り組む中で、特攻隊や沖縄戦についても勉強する機会があった。しかしながら、実際に沖縄県のひめゆりの平和記念資料館や鹿児島県の知覧特攻平和会館を訪れると、戦死された一人一人の生活や思いを

感じ、自分の目で見ることでしか感じられないものがあった。また、元ひめゆり学徒隊の方の体験講話は、資料の文字を超えて、戦争の悲惨さを語る生の声が直接心に突き刺さり、言葉では言い表せないほどの衝撃が今でも心に残っている。実際に見ることで、心で感じるができるのである。

また、2016年アメリカのケリー国務長官が広島原爆資料館を見て「ガットレンチング（はらわたをえぐられるような思い）」という言葉述べていた。これは実際に自分の目でみて資料と向き合い、被爆者に思いを馳せたからこそ発せられたものである。

核保有国は核抑止を理由に核保有を正当化しようとする。しかし、この理論は、核のことを知らないリーダーたちの理論だ。このような危うい理論で核保有を正当化してはならない。“Seeing is believing.”あなた方には自分の目で核が使用されたときのことを確かめてほしい。あなた方の理論がいかにか机上の空論にすぎないことか気づくだろう。

私を含め学生は、学校のテストで間違えた部分を復習し、分からない部分はそれを理解している人に質問をして二度と同じ間違いをしないようにする。あなた方も学生の頃を思い起こし、原爆が投下されたときのことを学び、二度と繰り返さないようにしてほしい。

「核なき世界」は持続可能な未来を残すことにもつながる。2022年にはクリーンで健康かつ持続可能な環境へのアクセスは普遍的な人権であると宣言された。「核なき世界」は地球環境を守るだけでなく、軍事費にかけているお金で、数多くの命を救え、たくさんの幸せを生み出すことができる。

地球は私たち一人一人の地球市民が住む場所であるから、被爆地ナガサキと核保有国のリーダーであるあなた方と手を取り合い、対話を重ね、「ナガサキを最後の被爆地に」し、世界恒久平和を実現したい。

今年4月には、アメリカのトーマスグリーンフィールド国連大使が長崎を訪れ、被爆の実相に触れた際に、「長崎が核の恐怖を体験する最後の場所に」と切に願っていた。被爆地ナガサキはあなた方が長崎を訪れ、被爆の実相に触れることを常に切望している。「核なき未来」の実現は、被爆地や非保有国だけでは成し遂げることはできない。あなた方の力が必要だ。あなた方とともに、「核なき未来」をつくりたいのだ。

今こそ核保有国のリーダーから核なき未来のリーダーに変わるときだ。